

無著と世親の像（木造無著・世親立像） 国宝

仏師・運慶（1150～1223年）による1212年の作とされるこれらの像は、無著と世親という有名な学僧の像である。この2人は4世紀から5世紀にかけてインド北西部に生き、兄弟であったとされている。未来の仏陀である弥勒は無著の夢に現れ、無著は弥勒の教えを書き留め、それを世親に渡した、とされている。興福寺を総本山とする法相宗の信者たちは、この2人を宗派の創設者として崇めている。

この非常に生き生きとした、寄木造りの像を制作するにあたって、運慶は、民族や歴史的な文脈を超えた、仏教の実践者の理想を表現しようとした。この2つの像は対をなすものだが、その表情は大きく異なっている。老齡の、少しやせ衰えた無著は、穏やかに衆生を見下ろしている。胸に布で包んだ小包を抱えている。弟の世親は中年の男性として描かれており、力強い肉体を持ち、決意に満ちた眼差しで遠くを見つめている。どちらの像も、大きな体が強い威厳を与える一方で、水晶の目は表情に生き生きとした感じを与えている。こうした理由から、これらの像は運慶の代表作であるだけでなく、日本の彫刻の歴史における最高傑作ともされている。